

『闇の絵巻』の教材分析

横山明弘

序

梶井基次郎は筑摩書房版全集の年譜によると、大正8年(1919)9月第三高等学校理科甲類に入学する。翌年4月肋膜炎にかかり、しだいに病勢が悪化し、大正13年東京帝国大学英吉利文学科に入学したが、大正15年には血痰や咯血があり、卒業論文提出を断念し、転地療養を思い立つ。そして湯ヶ島温泉で1年半に及ぶ療養生活を送ることになる。『闇の絵巻』は昭和3年(1928)5月伊豆湯ヶ島を引上げ、しばらくの東京生活の後、同年9月大阪に帰郷してからの作品である。昭和5年8月中旬脱稿され、10月『詩・現実』に発表された。

鈴木二三雄が「梶井文学の華麗な金字塔というべき傑作」^①と述べており、また高等学校の教科書掲載作品でもあるのに、この作品を組上に載せた作品論は極めて少ない^②。この論文においては、分析批評を援用して作品についての教材分析を試み、特にその主題に関して私見を述べたい。

1 素材・題材・主材

梶井はこの作品の素材について、次のような書簡を友人に送っている。

材料は昔の材料だ。湯本館から湯川屋までの夜の暗の路を丹念に書かうとしてゐるのだ。闇の風景が書けたらいいので、それだけのものだけに非常に書き難いのだ。

(昭和4年4月14日 淀野隆三宛)

それからもう一つ湯ヶ島の溪沿ひの闇の街道を——ただその五丁程の道の景色だけをその感情と空想とともに絵巻物のやうに書かうと思つてゐる、……

(昭和5年3月22日 北川冬彦宛)

昭和元年(1926)26歳の梶井は病氣療養のため東京を離れ、伊豆天城山中の湯ヶ島温泉に赴いた。湯ヶ島は伊豆半島の中央部にある湯治場で、当時の湯ヶ島は全体で約600軒のうち437軒が農業を営んでおり、周囲を山に囲まれたのどかな農村地帯だったという^③。その地に逗留していた2歳年長の川端康成を訪ね、湯川屋を紹介してもらう。その頃の湯ヶ島温泉には、川端の居た湯本館とこの湯川屋と落合楼という3軒の旅館しかなかった。湯川屋へ落ち着いてからの梶井はよく川端を訪問し、夜更けまで時を過ごした。この作品は川端を訪ねた帰途の〈療養地の街道の闇〉を素材にして、「絵巻物」風の短篇にまとめたものである。

この作品から題材を拾うと、導入部〈強盗(プロローグ)・闇への恐怖・闇のなかの安息〉、展

開部〈療養地の闇——枯萱山・樹木・電燈・柚の木・私の遺棄・山山の尾根、街道の闇——青蛙・電灯・川の瀬・炭焼小屋・道の勾配・椎の木・字の光・竹藪・杉林・人家の光〉、終結部〈一人の男・瀬の音・霧の夜・街道の闇・都会の電燈（エピローグ）〉となる。

この中で展開部の「私の遺棄」は、昭和2年の11月上旬梶井が紅葉を見るため、天城トンネルまで出かけ、峠を越えて湯ヶ野まで歩き、一泊して帰り、身体を痛めた経験の題材化である。この題材は『冬の蠅』においては、療養中の主人公が自分の体を痛めつけるという自暴自棄的な生活を描くことに使用されているが、この作品においては出かけていったその峠から、「深い溪が闇のなかへ沈むのを見た。」と描かれているにすぎない。

主材とは作品に繰り返し出てきて、題材全体を引き締める中心的な事柄である。まず導入部では闇の中には「摺足でもして進むほかはないだろう。」と述べ、それは「苦渋や不安や恐怖の感情で一ぱいになつた一歩だ。」と言う。しかし一方闇の中で気を変えれば、「深い安堵」や「爽やかな安息」が我々を包んでくれるだろうと言っている。

展開部では夜になると、枯萱山が「黒ぐろとした畏怖」に変わり、樹木が「異形な姿」を現わしたと述べ、そして黒ぐろとした山の中腹の一個の電燈の光が「なんとなしに恐怖を呼び起こした。」と続く。作者はその〈恐怖〉を「バアーンとシンバルを叩いたような感じ」と表現している。一方主人公は「闇を愛することを覚えた。」と言い、「好んで闇のなかへ出かけた。」とも言っている。

また広々とした展望のなかへ出ると、「煮え切らない考え」を振り落してしまったように感じ、「新しい決意」や「秘やかな情熱」が自分を満たしてくると言っている。「煮え切らない考え」とは、導入部で提示された、闇に対して〈不安〉や〈恐怖〉を感じる考えと、闇と一体化して〈安堵〉や〈安息〉を得ようという考えとの迷いであろう。「新しい決意」「秘やかな情熱」とは、導入部で使用されている「絶望への情熱」という似た表現を参考にすると、先程の闇と一体化して〈安堵〉や〈安息〉を得ようという「決意」や「情熱」と考えられる。

終結部では一人の男が家の前の明るみから闇の中に入って行くのを見て、「自分も暫らくすればあの男のやうに闇のなかへ消えてゆくのだ。」と感動し、その男の姿は「そんなにも感情的であつた。」と述懐している。同じ題材を扱った『蒼穹』では、この部分が「云ひ知れぬ恐怖と情熱を覚えた」となっているので、「感情的」という表現の内容を類推することができる。そしてその家を過ぎて、右手に切り立った崖がある暗い道を歩いていくと、「不安が高まつて来る。」と述べ、その不安が極点にまで達しようとしたとき、聞こえてきた瀬の音に「心が振じ切れそうになる。」と言うのである。一方電灯が見え、闇が終って、自分の部屋まで〈安堵〉と共に歩いているのに、霧の夜があり、それで〈安堵〉が消滅してしまい、「遠い遠い気持」になると結ばれる。

それに深い溪谷が「闇のなかへ沈む」とか、瀬の白い流れが「闇のなかへ消えてゆく」とか、闇が「街道を呑み込んでしまう。」とかいう表現は、前述した一人の男が「闇のなかへはいつて行つてしまつた。」と類似した発想であり、これらを凝視する主人公の内面は、闇に対する〈恐

怖)と闇と一体化することによって得られる(安息)で揺れ動いていると思われる。以上の分析により、この作品の主材を(闇に対する恐怖と安息)と読むことができる。

2 主題

まずこの作品について言及している論文を見ておくことにする⁶⁾。

湯ヶ島時代の回想であり、「絶望への情熱」などといふ言葉も出てくるが、この作品は決して「絶望への情熱」から書かれたものではない。『愛撫』のときにも言ったが、作者は既にさういう境地からは立派に卒業し、悠揚迫らざる態度で闇の絵巻を精巧にくり展げる。傑作といつてよいだろう。

(中谷孝雄『梶井基次郎』筑摩書房 1969年 269頁)

ところで「闇の絵巻」は、二系統のうち、親しむべき自然美としての闇を主として描いており、死や絶望と直結し、暗い情熱、激しい行動と直結した闇の方は、すくなくとも中心的主題とはなっていない。

(須藤松雄『梶井基次郎研究〔改訂版〕』明治書院 1976年 247頁)

この時梶井は、自己の存在を否定する、畏怖すべきものであった(闇)から、安息を与え、親しいものとしての(闇)へ至る自己認識の道筋を「絵巻物」として対象化し得たのである。いわば『闇の絵巻』定稿は、自己存在の認識過程についての集大成といえるものであった。

(熊木哲「梶井基次郎の(闇)をめぐって」『中央大学国文20』1977年2月 57頁)

闇のつくりだす恐怖・不安を、どのようにして深い安堵・安息へと変へていくか、モチーフの全貌は姿をあらわす。恐怖から安息へ、この生存心理の路線変更が、『闇の絵巻』の本意である。

(五十嵐誠毅「(梶井基次郎)ノートその十一」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第36巻』1987年 39頁)

これらの見解に共通していることは、湯ヶ島時代の『冬の蠅』『蒼穹』に描かれた闇は(死)や(絶望)、(不安)や(恐怖)と結びついており、『闇の絵巻』に描かれた闇は(親しみ)や(安堵)や(安息)と結びついているという点である。また五十嵐誠毅は先の論文で、闇への愛着を媒介にして闇への(不安)・(恐怖)を(放棄)・(解脱)していると述べている⁷⁾。しかし私はこのような読みと見解を異にしたい。主材分析で試みたように、この作品の導入部・展開部・終結部それぞれにおいて、闇への(不安)や(恐怖)が何度も濃密に描き込まれている。特にクライマックスでは「心が振じ切れそうになる。」という表現があり、(不安)や(恐怖)がこの作品の基調の一つであることは疑えない。上述した見解ではその事実を説明できないのである。

湯ヶ島時代の作品と比べれば、確かに闇に関する(不安)や(恐怖)は薄められていると言えるだろう。しかしそれは相対的に「薄められている」だけであって、決して(放棄)・(解脱)されているわけではない。梶井の湯ヶ島時代の作品を知らない読者や生徒たちはそのように読むことができるだろうか⁸⁾。須藤松雄は「闇のなかに消えていく男」の題材は、「人間を呑み尽くす

死としての闇」へとつながっており、湯ヶ島時代の闇の面目が含まれ残っているのと、この題材に消極的な価値しか認めていない。しかし私は「主材」で言及したように、この題材には主題を支える積極的な機能があると考え。私の見解では湯ヶ島時代の〈死〉や〈恐怖〉と直結した闇に、〈安堵〉や〈安息〉を抱かせる闇が加えられたのであり、この作品を〈死や恐怖と直結した闇〉と〈安堵や安息をもたらす闇〉の両面から捉えなければ、主題は把握できないと考える。

ではここで主人公の葛藤分析を中心に、私自身の主題観を述べることにする。「主材」のところで述べたように、導入部では闇の中に進むには〈不安〉や〈恐怖〉が生じるという一方、闇の中で気を変えれば、〈安堵〉や〈安息〉に包まれると言っている。つまり闇に対する〈恐怖〉と闇と一体化することによってもたらされる〈安息〉とが交錯しているのである。このように葛藤がすでに導入部において提示されている。

展開部では具体的に闇に対する〈恐怖〉が語られると共に、広々とした展望の中に出ると、「新しい決意」や「秘そやかな情熱」が生まれてくると述べている。この「新しい決意」や「秘そやかな情熱」とは、〈闇と一体化しようとする決意や情熱〉のことであり、それによって〈安息〉がもたらされるのである。主人公は闇に〈恐怖〉を感じる一方、闇と一体化することによって、「深い安堵」に包まれたいと思っているのである。展開部では闇に対する〈恐怖〉と〈安息〉が具体的に表現され、そしてやはり交錯しているのである。

終結部の「心が振じ切れそうになる」場面は〈恐怖〉の頂点であり、クライマックスと考えられる。「するとその途端、道の行手にバツと一箇の電燈が見える。闇はそこで終わったのだ。」という闇の消滅と共に、闇に対する〈恐怖〉と〈安息〉の葛藤もここで消失したように見える。「電燈を見ながらゆく道は心易い」とあり、主人公は「安堵とともに」旅館の部屋への道を歩いていく。しかし霧にかすみ、電燈が遠くに見え、「いつもの安堵が消え」「遠い遠い気持ちになる。」という描写によって、やはり葛藤は消滅することなく作品は終るのである。したがってこの葛藤分析や主材分析から、この作品の主題を〈闇（死）に対する恐怖と安息の交錯〉と読むことができる。

ところで〈闇〉に〈死〉の意味を持たせたのは、この作品における〈闇〉には象徴的な意味が込められているからである。大谷晃一は「闇とは絶望であり、死を意味する。」⁶⁾と断言している。これについては梶井の書簡を見ても首肯することができる。次節で書簡などによって、この〈闇〉については論じるつもりであるが、作品中では「私はながい間ある山間の療養地に暮してゐた。」という叙述によって、主人公が療養中の身であるということ、ほんの僅かの勾配のために、「私は息切れがして往来の上で立留まった。」という描写によって、病が重症であるということを押さえておきたい。主題文として〈主人公は闇（死）に不安・恐怖を感じる一方、闇（死）と一体化することによって、安堵・安息を得たいという交錯する心情を抱いている。〉とまとめることができる。

作品の通読後、生徒（高1）にすぐにまとめさせた主題を紹介すると、a 闇のなかでの安息・ b 闇の美・ c 闇の中での孤独・ d 闇という絶望への情熱・ e 闇の持つ神秘性への恐怖・ f 闇の中

での存在への不安・g 闇への畏怖と安堵（愛）などである。

a・bは先に挙げた論者と同様の見解である。cは焦点が合っておらず、dは作品中の「絶望への情熱」という言葉にこだわっている。e・fを見るとやはりこの作品から、〈不安〉や〈恐怖〉を読んでいることが理解できる。私としてはa・b系統とe・f系統をまとめたgを支持したい。

3 〈闇〉

この作品の主人公と作者の〈離れ〉は極めて近い。それは次の書簡を見ても明らかである。

僕は今度三好が立つ前の日頃からまた血痰が出だして今日やつととまつた 空咳が出て胸が頼りない それは三好と近藤さん（中略）など、と瀧見に行つたのが祟つたらしい、あんな一里半程の歩行が有害だとすると僕が貯めてゐた精力や身体に感じてゐた元気も実にまだ幼芽のやうに貧弱なものだつたのだ そんなことを思つて見ると楽しみにしてゐたときがまた遠くになつて 嫌だ嫌だと思ふ

（昭和2年4月11日 淀野隆三宛）

この書簡は療養地の湯ヶ島での生活を記しており、「楽しみ」とは東京に出ることである。梶井の書簡や手記などを讀むと、梶井の生活がこの作品に濃厚に反映していることがよく理解できる。この節では書簡や他の作品を通して、〈闇〉というキーワードを分析し、『闇の絵巻』の作品理解を深めたい。

まず『イメージ・シンボル辞典』（大修館）には、〈闇〉の意味として14例上げられており、この作品で表現されている〈闇〉と関係していると思われる意味をいくつか挙げてみる。③光の消えた後の、退行的で邪悪なもの④神秘的無（大いな虚空）⑥不幸、精神的危機⑩死などである。梶井の〈闇〉にもこのような意味のあることが、次の書簡から伺える。

一年経つても依然希望は新しくならない 変転の多かるべき二十七歳頃の身体を病気とは云ひながらにもせず湯ヶ島へ埋めてしまつたのはわれながら腑甲斐なく思ふ 心に生じた徴候は生きるよりも寧ろ死へ突入しようとする傾向だ（しかしこれは現実的といふよりも観念的であるから現実的な心配はいらぬ）僕の観念は愛を拒否しはじめ社会共存から脱しようとし、日光より闇を嬉ばうとしてゐる

（昭和2年12月14日 北川冬彦宛）

ここでは〈生〉と〈死〉、〈愛〉と〈憎悪〉が対比的に捉えられ、それらが〈日光〉と〈闇〉によって象徴され、梶井は〈闇〉の方に惹かれている。梶井における〈闇〉が〈死〉や〈憎悪〉の象徴であるということを理解しておくことは重要である。梶井が〈闇〉つまり〈死〉に惹かれていたことは、「梶井は湯ヶ島時代、どうかすると自殺を考へて眠れない夜が幾晩も続いたらしい」⁹⁾という中谷孝雄の証言によっても裏づけられる。

梶井に北川冬彦宛の「今『闇』といふ短篇を書いてゐる。絶望に駆られた情熱、闇への情熱を書かうとしてゐるがうまくゆかない。」（昭和2年10月31日）という書簡がある。この「絶望に駆

られた情熱」について、大谷見一は「絶望への情熱とは、死への思いである。」と述べている⁽⁴⁰⁾。これについて『闇の絵巻』第一稿にこのような主題で書かれたが、それは中断して、結局その主題は『冬の蠅』（昭和3年2月脱稿）に定着し、以後の作品にこの主題は現われないと熊木哲は論じている⁽⁴¹⁾。私もこの見解には賛同する。例えば『冬の蠅』の「私は残酷な調子で自分を鞭打った。歩け。歩け。歩き殺してしまへ。」というような描写に、〈死〉と〈憎悪〉に惹かれる梶井の内面が鮮やかに表現されている。

熊木が論じているように、『冬の蠅』以後の作品にはこのような内容が主題として最早現れることはない。『闇の絵巻』にも「絶望への情熱」という言葉が出てくるが、それは主題としてではない。このような感情を梶井は超克したのであろう。そのことが結末の次の描写に暗示されている。

何処かに捜して宿をとらうか、それとも今の女のところへ帰つてゆかうか、それはいづれにしても私の憎悪に充ちた荒々しい心はこの港の埠頭で尽きてゐた。

中谷孝雄は〈絶望〉について、「経済界の恐慌と共産主義の妖怪とのために、ぎりぎりのどたん場まで追いつめられたインテリの苦悶だつたといつてよいだろう。」⁽⁴²⁾と述べている。確かにこの時代、芥川龍之介の自殺があり、当時の文学者に大きな影響を与えているが、この作品から、そのような読みの根拠を引き出すことは困難である。やはり宿痾を背負う自己の運命に対するものと考えておきたい。

次に前後するが、『冬の蠅』の1月前に脱稿された『蒼穹』（昭和3年1月）を見ると、やはり「絶望に駆られた情熱」という主材が描かれている。

その闇のなかへ同じやうな絶望的順序で消えてゆく私自身を想像し、云ひ知れぬ恐怖と情熱を覚えたのである。

この箇所については「主材」のところでも少し触れたが、主人公は「白日の闇」に対して、「恐怖と情熱を覚えた」と言っている。このように湯ヶ島時代の『冬の蠅』『蒼穹』には、「絶望に駆られた情熱」「闇への情熱」という主材が描かれているのである。それから2年半後に書かれた『闇の絵巻』には論者たちが指摘しているように、〈憎悪〉や〈絶望〉の感情は退いている。死の50日程前の書簡にその事情が回想されている。

……僕は昔は気持よい自然観照の眼から一度自分の行手 自分の病気といふことを振返つて見ると やけくそにならざるを得ないやうな気持になつて、それがあのやうな未熟な作品になつたかと思ふが やはり人間といふものはやけくそではいけないものといふことが僕にもわかつて来たので それは文学といはず僕の生活全体をその方に向けるつもりで僕もゐる、非常にあたり前でつまらないやうだが 絶望しながら生きてゐるといふことは結局僕には出来ない

（昭和7年2月5日 中谷孝雄宛）

この書簡を見ると梶井が「人間といふものはやけくそではいけない」ということを自覚し、〈憎悪〉や〈絶望〉を超克していったということが理解できる。

次に〈憎悪〉や〈絶望〉の消滅の後に生成した〈安息〉について述べている書簡を引用する。先程の書簡とはほぼ同時期である。

……心の最も最後の奴が自分が何時かは死ぬといふことをどうしても受け付けず、嫌がるのだ。それからあとはどう考へても死ぬのが嫌だ。それで煩悶した。一昨日の夜は夕方より熱が少し高くいろいろのことに肝癢を立て深更に至った、すると熱のだんだん引いてくるとともに近來になく頭が澄み切つて来て自分の運命が玻璃鏡に現れるやうに現はれた、勿論それは苦しい運命だ、すると卑怯なやうだが急に死といふものが親しく見え出した いかにもそれは最後の安息だといふ気がするのだ。

(昭和7年2月10日 中谷孝雄宛書簡の下書き)

この書簡から死に対する〈恐怖〉が〈安息〉へと推移していることがわかる。自己の宿痾に絶望し、自暴自棄的になり、観念的に死を考へていた状況から、病が進むにつれて〈諦念〉が生じ、〈安息〉が生れる状況に移ったのである。しかしそれは論者たちが主張するやうな完全な安息ではない。やはり〈恐怖〉があり、その運命から免れたいのである。

……若し以前犯した無理の量が致死的に多かつたら自分の命は助からない、しかし若しその量がすれすれにでも生命をあますやうだつたら そこから何とかもうすこし楽になるやうな方へ向かつて来るかもしれない——そんなことを病中思つたりしたのです

(昭和7年2月6日 廣津和郎宛)

『闇の絵巻』が描かれたのは、これらの書簡が書かれた1年半程前のことである。しかしその当時から、梶井の内面を〈死に対する恐怖と安息の交錯〉が占め続けていたと推測することは十分可能であろう。このような死に対する心情の迷い・動揺がそのまま『闇の絵巻』に描かれ、主題を成立させているのである⁽¹³⁾。

4 その他の問題点

導入部において時間・場所・人物を分析する必要があるが、それを試みておくことにする。時間は作品中に「提灯」や「馬力」などが出てくるので、一昔前であることが分かる。作者の実生活から昭和元年から3年の間頃ということが特定できる。季節は冬の季語である「炭焼小屋」が出てくるが、秋の季語である「霧」や「柚」などもあるので、晩秋と考えられる。場所はこれも実生活から、「山間の療養地」である湯ヶ島であることがわかる。人物については主題との関係で、療養中の身であることを押さえておく必要がある。

第二の問題は展開部にある「おい。何時まで俺達はこんなことをしてゐなきやならないんだ」という会話の解釈である。黒い山々の尾根がこのように語る。山々の尾根は常に同じような状態で存在し続けることが当然であるから、これは筋の展開上、諧謔を狙ったものと理解できる。しかし「療養地の身の嘔むような孤独」を感じている主人公の気持ちが反映されていると、ある生徒が深層心理的な解釈した。つまり早く回復して、寂しい環境から脱出したいという主人公の願望の表われであるという解釈である。このような解釈も当然成立するだろう。「3闇」のところ

で引用したが、「変転の多かるべき二十七歳頃の身体を病気とは云ひながらなにもせず湯ヶ島へ埋めてしまつたのはわれながら腑甲斐なく思ふ」（昭和2年12月14日）という北川冬彦宛書簡の一節を見ても、梶井自身一刻も早く健康を取り戻して、東京へ出たかったのである。

第三に梶井が闇という対象を視覚だけでなく、嗅覚や聴覚をも働かせて捉えている点である。嗅覚として「ひとしきりすると闇のなかからは芳烈な袖の匂ひが立ち騰つて来た。」「だから街道は日によつてはその樹脂臭い匂ひや、また日によつては馬力の通つた昼間の匂ひを残してあたりするのだつた。」という箇所があげられる。聴覚としては「バーンとシンバルを叩いたやうな感じである。」「……その高笑ひがワツハツハ、ワツハツハときこえて来るやうな気のすることがある。」という箇所がある。特に前者については、光を視覚で捉えた〈恐怖〉の印象を聴覚的な明喩で表現しているのが、五十嵐誠毅はそれを「共感覺的な換位性」と言っている⁽⁴⁾。

第四に視点であるが、一人称視点をとることによって、「秘そやかな情熱が静かに私を満たして来る。」とか「不安が高まつて来る。」とか、闇に対する微妙な心情を表現することが出来ている。

結論

本論文は分析批評を援用して『闇の絵巻』の教材分析を試み、特にその主題を中心に述べてきた。この作品はこれまで、湯ヶ島時代の『冬の蠅』『蒼穹』に描かれた闇は〈死〉や〈絶望〉、〈不安〉や〈恐怖〉と結びついており、『闇の絵巻』に描かれた闇は〈親しみ〉や〈安堵〉や〈安息〉と結びついていると論じられてきた。それに対して私は〈憎悪〉や〈絶望〉の感情が払拭されていることに異論をとなえる余地はないが、この作品を〈死や恐怖と直結した闇〉と〈安堵や安息をもたらす闇〉の両面から捉えなければならぬとし、作品の主題を〈闇（死）に対する恐怖と安息の交錯〉と読んだ。

最後にこの作品の教材的価値について触れておきたい。この作品の教材的価値は、死がすでに予定として組み込まれてしまった人間の心情理解にあると言える。死に対する〈恐怖〉と、死ねば楽になり〈安息〉が得られるという〈諦念〉と〈慰撫〉、それらの交錯する微細な心情を、表面上闇への心情として象徴的に描き出している。われわれ読者は闇の美しさに魅了されながら、作者の深刻な内面に触れざるを得ないのである。

注

- (1) 鈴木二三雄『梶井基次郎論』有精堂 1985年 35頁
- (2) 熊木哲の研究文献目録（1982年）によると、『闇の絵巻』の作品論は熊木哲と中島国彦の2本のみである。その後本論文でも引用した五十嵐誠毅の論文が1987年に発表されている。
- (3) 小山榮雅『梶井基次郎の肖像』皆美社 1986年 155頁
- (4) その他に次のような見解がある。

「作品『闇の絵巻』に於いて、彼は、闇に身をまかせ、闇の溶け入ろうとする濁りのない情

念を、闇の道を歩いていくときの透明な緊張感を、回想する形式の下にゆったりとした語り口で語る。」

(鈴木沙那美「転移する魂 梶井基次郎」 社会思想社 1977年 199頁)

「その闇は、単に夜、大自然をも人間をも包み込んでしまう闇のみならず、白昼に存在し、すべての生命、すべての消滅をも呑みこんでしまう「虚無」の闇をも意味している。大阪に帰ってから思い出される「深い安堵」をもたらず闇(たとえば「闇の絵巻」)と異なり、この時期の闇には、虚無的な切迫観が強い。」

(濱川勝彦「梶井基次郎の人と作品」『鑑賞日本現代文学 第17巻』 角川書店 1982年 20頁)

「従って三年の後故郷大阪においては既にその情熱から脱却し、冷静な境地において過去の感動を昇華し凝縮して、絢爛たる絵巻となしたのである。」

(鈴木二三雄「梶井基次郎論」 有精堂 1985年 36頁)

(5) 五十嵐誠毅「〈梶井基次郎〉ノートその十一」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第36巻』 1987年 47頁

(6) 私の実践においても、この作品の通読後、主題を「闇の美」「闇のなかでの安息」とした生徒もいるが、それは少数派であった。

(7) 須藤松雄『梶井基次郎研究〔改訂版〕』 明治書院 1976年 260頁

(8) 大谷晃一『評伝梶井基次郎』 河出書房新社 1978年 284頁

(9) 中谷孝雄『梶井基次郎』 筑摩書房 1969年 231頁

また中谷は「上京を決意した前後からさういふ『闇への情熱』から徐々に開放されつつあつたやうだ。」とつけ加えている。

(10) (8)に同じ 229頁

また大谷は次のような興味ある事実を提供している。「ところが、この時期、彼は宇野千代への恋にもう一つの情熱を燃やしていたのだ。」

(11) 熊木哲「梶井基次郎の〈闇〉をめぐって」『中央大学国文20』 1977年2月 53頁

(12) (9)に同じ 222頁

(13) 須藤松雄は『のんきな患者』論の中で、「死と言う自然に生が吸い込まれて行く姿に安心立命する静寂境——『冬の日』に引用されていた丈草の句、『水底の岩に落ちつく木の葉かな』に託した境地——には達しなかったのである。達することにむしろ反発したのである。」と述べている。しかしこのような読みを『闇の絵巻』には適用していない。

(7)に同じ 278頁

(14) (5)に同じ 44頁